

名誉顧問のコモンセンス

文章とその真意 ― 3

白居易の「諷諭詩」



命がけの諷諭詩 漢詩人の白居易(はっきょい)は、字(あざな:実名を使いたくない場合の名前)の白樂天(はらくてん)の名でも知られています。彼の父親が地方のお役人であったので出自が低く、名門の子弟ではなかったため官職には就けませんでした。若い頃から詩才があり、16才のときに既に当時の詩壇の名士顧況(こきょう)が感嘆するほどの詩を作っていました。白居易の気品があり優雅な詩は昔から日本でも人気で、紫式部の『源氏物語』や清少納言の『枕草紙』でも言及されています。一方で、極めて高潔な精神の持ち主で、下級の役人

になっても、容易に人に屈服しない気骨の人で自分の意志を曲げない硬骨の人でもありました。駒田先生の解説によると、相手が間違っていると思ったら、それが天子であれ、上司であれ、「詩」を作って批判しました。そのような詩を「諷諭詩」(ふうゆし)といい、遠まわしにそれとなく諭(さと)すことを「諷諭」といいます。

詩人としての政治家たち ここで気になるのは、お役人が世の中の悪を正そうとして「諷諭詩」などの「詩」を書くのですが、そのお役人たちに詩を書き、鑑賞するだけの才能や教養があったのでしょうか。日本人には考えられないことですが、あったのです。『三国志』で有名な魏の帝王武帝(曹操)は、「すぐれた文学者であった」と駒田さんはいいます。

駒田 — 曹操(そうそう)はすぐれた武将(戦略家)であり、すぐれた政治家(策略家)であったと同時にまた、すぐれた文学者でもあった。中国文学史上「建安(けんあん)文学」と呼ばれる画期的な一時期(古代から中世への過渡期に「文学」を自覚した作品が創造されだした一時期)をうちたてた功績者であって、彼が後漢の宰相であった建安年間(196—220)には、その正夫人卞(べん)氏とのあいだの長男曹丕(そうひ:文帝)、三男曹植(そうしよく)をはじめとして、いわゆる「建安七子」の孔融(こうゆう:字は文挙ぶんきょ)、陳琳(ちんりん:字は孔璋)、王粲(おうさん:字は仲宣ちゅうせん)、徐幹(じょかん:字は偉長いちょう)、阮禹(げんう:字は元瑜げんゆ)、應瑒(おうとう:字は徳漣とくれん)、劉楨(りゅうてい:字は公幹こうかん)ら、数多くの文学者が輩出したが、かれらはみな曹操の幕下(ばっか:膝元)に集まった人たちであった。

曹操だけではなく、その息子たちや家来たちも、優れた文学者なのです。お役人たちもそうで、白居易が匿名で書いたとしても、「諷諭詩」を読めば、彼の文体だとすぐに判別し、その詩の真意を間違いなく受け止め、過たず白居易を遠慮なく左遷にします。

駒田 — 白居易が自らの詩の中で最も高く評価したのは、世に有名な「長恨歌」でも「琵琶行」でもなく、この「諷諭詩」であったが、それは平明軽俗な詩風によってこそ生まれたものといってよからう。左拾遺(さしゅうい)に任ぜられてから彼がさかんに作った「諷諭詩」とは、ひとくちに言えば社会の矛盾を指摘して政治を諷刺した詩である。天子の行いを諫(いさ)める役柄の「諫官」(かんかん)である左拾遺という官にあった白居易は、おそらくは天子に進言したさまざまなことから、形をかえて詩に作り、天下の人々にも訴えようとした。

白居易は、沢山の諷諭詩を書きました。その度に左遷されました。でも、書くのをやめませんでした。

駒田 — 白居易は「韓・白」と併称されるように、韓愈(かんゆ)とともに中唐の代表的な詩人である。だがこの二人は、中唐の詩壇に相並んでいたというよりは、むしろ相對峙して詩壇を二分していたのであった。韓愈の詩が「陰怪奇崛」(けんかいきくつ)と評されたのとは対照的に、白居易の詩は「輕易平俗」(けいひへいぞく)と評された。韓愈の詩が理性的であったのに対して、白居易の詩は感性的であった。

ここでは、余り日本では知られていない白居易の当節批判の「諷諭詩」を、二つ、読んでみましょう。

1 新豊折臂翁(しんぼうのうでをおりしおきな)

まずは、「新豊の臂(うで)を折った翁」という詩です。反戦詩であり、平和論です。また、訴状でもあります。

新豊(しんぼう:地名)の老翁八十八、頭鬢(とうびん)眉・髪 皆雪に似たり。玄孫に扶(たす)けられ店前に向かって行く。左臂は肩に憑(よ)り右臂(うで)は折る。
翁に問う — 「臂折れて来(よ)り、幾年ぞ」。
兼ねて問う — 「折るを致せしは何の因縁ぞ」と。

翁云う — 「貫(かん:本籍)は新豊県に属し、生れて聖代に逢い征戦(せいせん)無し。梨園歌管の声を聴くに慣れ、旗槍(きそう)と弓箭(きゅうせん)とを識らず。何(いづ)くも無くして天宝[時代になって]大いに兵を徴し戸に三丁(てい:壮丁・成年に達した男性)有れば一丁を点[てん:兵隊に選ばれる]す。点し得て駆り将(もつ)て何処にか去(ゆ)く。五月万里雲南に行く。聞道(きくなら)く雲南に瀘水(ろすいという名の川)有り。椒花落ちる時は瘴煙(しょうえん:毒気)起り、大軍徒渉するに水湯の如く、末だ過(よぎ)らざるに十人に二三は死す。村南・村北哭声(こくせい:嘆く声)哀し。児は爺孃(やじょう:父母)に別れ夫は妻に別る。皆云う前後蛮を征する者、千万人行きて一(一人の人)の廻(かえ)る無し」と。

是の時翁、年二十四。兵部の牒中(ちょうちゅう:札)に名字有り。夜深けて敢(あえ)て人に知らしめず。偷(ひそ)かに大石を将(もつ)て鎚(たた)きて臂を折る。弓を張り旗を簸(ふ)る俱(とも)に堪えず。茲(こ)れ従り始めて雲南に征くを免がる。骨砕け、筋傷れ、苦しからざるに非ず。且つ図る揀(えらび)退けられて郷土に帰るを。臂折れてより来々六十年。一肢廃すと雖も一身全(まった)し。今に至るも風雨陰寒の夜、直に天明に到るまで痛みて眠れず。痛みて眠れざるも終に悔いず。且つ喜ぶ、老身、今、独り在るを。然らずんば当時瀘水の頭(ほとり)、身死し、魂孤(こんこ)にして骨収められず、応(まさ)に雲南望郷の鬼と作(な)り、万人塚(ちょう)上に突くこと呦呦(ゆうゆう)たるべし。
老人の言、君、聴取せよ。君開かずや開元の宰相宋開府、辺功を賞せず、黠武(とくぶ:みだりに武力を使うこと)を防ぐを。又開かずや、天宝の宰相楊国忠、恩幸を求めんと欲して辺功(辺境で得た功績)を立てんとし、辺功未だ立たずして人の怨みを生ずるを。請う問え、新豊の臂を折りし翁に。

新豊のおじいさん。年は八十八で、髪も鬢の毛も、眉も髪も、雪のように真っ白である。玄孫にささえられながら茶店の前を歩いていく。左の腕は玄孫の肩に掛け、右の腕は折れて垂れさがっている。

「おじいさん、腕が折れてから何年になるんですか。それに、どういうわけで折れたのですか」。

おじいさんはいいます — 「わしの本籍は新豊県で、太平の御代に生れたので戦争なんてものではなく、梨園(玄宗が設けた歌舞団)の楽人たちの演奏を聞いて育ち、旗とか槍とか、弓とか矢とか、そんなものは知らなかった。ところが、やがて天宝の時代になると大きな召集があって、一軒に三人の壮丁がおれば一人は兵隊に取られた。取られた者は駆りたてられてどこへ行ったのかというと、五月の暑いさかりに万里のかなたの雲南へ行ったんだ。雲南には塩水という川があって、山椒の花の散るころには川から毒気が立ちのぼり、大軍は歩いてこの川を渡るのだが、水は湯のように煮えていて、渡りきらないうちに十人のうち二、三人は死んでしまうんだそうだ。村のあちこちで哀しい泣き声がきこえていたよ。それは、息子に別れる両親の泣き声、夫に別れ

る妻の泣き声だ。みんなはこういていた、これまで南蛮征伐に行った兵隊は、何千何万という数だが、一人も帰ってきた者はいないと。

このときわしは二十四だったが、軍から来た令状に名前が載っていた。そこで、夜がふけてから、誰にもわからないように、こっそりと、大きな石で腕をたたき折ったのだ。こうすれば、弓をひくことも旗をふることもできないから、これでやっと雲南へ行くことをまぬがれると思ってね。骨がくだけ筋がつぶれて、痛くてならなかったものの、それでも召集兵の中からはねのけられて帰郷することができた。

腕を折ってから六十年。手足のうちの一本はだめになったが、命は助かったわけだ。それからずっと今まで、雨や風の強い夜とか曇った寒い夜とかには、夜があけるまで腕が痛んで眠れない。だが、痛んで眠れなくても、後悔をしたことはない。老いぼれの身ながら、あのとき腕を折ったために、ただ一人、生き残ることのできたことがうれしいのだ。もし腕を折らなかったら、あのとき塩水のほとりで、死んでしまい、轡がひとりぼっちで、骨も拾ってもらえず、雲南の地の望郷の亡霊になって、柵豪のほとりで悲しい声をあげて泣いているだろう」。

このおじいさんの言葉を、よく聞いてもらいたい。開元時代の名宰相宋璟は、辺境での戦功を賞することなく、無益な戦争を防ぐことに努めたではないか。

また、天宝時代の悪宰相楊国忠は、天子の恩寵を得んがために、辺境での戦功をたてようとした。だが彼はその戦功をたてるよりもさきに、人民の恨みを買ったではないか。無益な戦争がいかに人民を苦しめるものであるかは、この新豊の腕を折ったおじいさんに聞けばわかるであろう。

2 「苦宮市也」（宮市に苦しむなり）

もう一つ、白居易の「諷諭詩」をご紹介します。市場で炭を売る貧しい老いた爺さん「売炭翁」（ばいたんおう）のお話です。これも、辛いお話です。

駒田 ー 白居易の「諷諭詩」は、元和四年（八〇九）にまとめられた「新樂府」五十首と元和五年に作られた「秦（しん）中吟」十首とがその代表作であるが、物語風な長い詩が多い。先ず「苦宮市也」（きゅうしに苦しむなり）という題注のある「売炭翁」（炭を売る翁）を挙げよう。「宮市」（きゅうし）とは宮中の物資調達機関で係官の大半は宦官であり、市内を探索してめばしい物を見つけると勅命と称して安く買いあげ、中には強奪する者もあったという。

炭を売る翁 薪を伐り炭を焼く南山の中。満面の塵灰煙火の色。

両鬢蒼々として十指黒し。炭を売り銭を得て何の営む所ぞ。

身上の衣裳、口中の食。憐れむ可し身上の衣、正に単なり。

心炭の賤（やす）きを憂え、天の寒きを願う。

夜来城外一尺の雪、暁に炭車に駕して、氷轍を輾（ひ）く。

牛困（つか）れ、人飢えて、日己に高く、市の南門外、泥中に歇（やす）む。

翩々（へんぺん）たる両騎来る。走れ、誰ぞ。

黄衣の使者と白衫（はくさん）の兒、手に文書を把（と）り、口に勅と称し、車を廻らし、牛を叱（しっ）し牽きて、北に向わしむ。

一車の炭、重さ千余斤。官使驅り將（も）ちて、惜しみ得ず。

半匹の紅綃（こうさ）一丈の綾、牛頭に繫けて炭の直に充（あ）つ。

炭売りのじいさんは、終南山の山中で薪を伐り炭を焼いて暮らしている。
顔じゅうほこりや灰にまみれて色はすすけ、鬚(ひげ)はごましおで、十本の指はまっ黒である。
炭を売って銭をもうけ、どうしようというのか。
身につける衣服と口にいれる食べ物を買うためである。
ところが気の毒に、身につけているのは単衣(ひとえ)もの一枚である。
それでもじいさんは炭が安くなることを心配して、もっと寒くなるように願っている。
願いかなって昨夜から雪が降りだし、城外では一尺も積った。
じいさんは明けがた炭卓を牛につなぎ、凍てついた道を引かせていく。
牛は疲れ、じいさんは腹が減り、日はもう高くのぼってしまった。
そこで市場の南門の外の泥道で一休みした。
そのとき勢いよく駆けつけてきた二人の騎馬の男。
それは何者かというとき黄衣を着た宮市(きゅうし)の使者と白い上衣を着た若者である。
手には書きつけを持ち、口には勅命だと叫び、車の向きをかえさせ、牛を叱って北の方へ引っぱっていかせる。
車に積んだ炭の重さは千斤あまりにもなるが、宮市の使者につかまって駆りたてられたからにはいくら惜しんでもどう仕様もない。
たった半匹の絹(うすぎぬ)と一丈ばかりの綾(あやぎぬ)。
使者が炭の代金だといって牛の頭にひっかけてたのはそれだけだった。

詩人で役人が書く「諷諭詩」 貧しい者や歳とった弱きをいじめるお役人の悪行を曝(さら)した詩です。これも、文学なのです。当時の中国では、世相と文学は同じ次元にあります。どちらも人生の一部なのですから。特に、詩人でお役人である心ある人たちは、政治の腐敗を黙って見逃すわけにはいきません。お得意の筆を使って「苛斂誅求」(かれんちゅうきゅう:特に税金をむごきびしくとりたてること)を遠慮なく曝(あば)きます。「諷諭詩」という詩のジャンルが独立して存在しているのも中国の社会が健全なところですよ — といっているのか、「諷諭詩」が必要なほど「苛斂誅求」が横行しているからなのか、どちらかです。しかし、白居易などの優れた詩人でお役人たちが庶民の身方であるのは羨ましい限りです。

意見 こういった詩人であるお役人の存在は、「全体最適」を目指す「ガバナンス」(社会を統治する政治・政府)にとって「ノイズ」(雑音)でしかありません。政府の政策を自分の頭で考えて、個人としての国民の尊厳と人格の尊重を立場を主張する詩人たちの存在は、個人が脆弱な存在ではなくて、倫理や責任をもつ身体をもった意見をいう主体的な国民であり市民そのもののものです。でもどうして、才ある役人たちは世間に訴えるのに「漢詩」にして発表するのでしょうか？ 直訴状でも、立て看板でも、瓦版でもよさそうなものです。行政に対する意見や異論を、どうして、わざわざ文学的な「諷諭詩」などに仕立て公表するのでしょうか？

真意 それは、詩の形式にすると読んだ人たちが、文化的な感動を受け、覚えやすく、引用しやすいからです。漢詩には、五言絶句や七言絶句のように長さが決まっていて、必ず行毎に韻を踏む決りがあります。日本でも、俳句は五七五で、和歌は五七五七七の形をとり、季語や切り字など、形式や様式に決まりがあるのは、覚えやすく、引用しやすく、感動を授受しやすいからです。良くできたもののほど、人口に膾炙(かいしゃ;広く人の話題や評判になる)されます。それで、人気の「諷諭詩」は、立ち所にコピーされ、拡散し、作者の意図が広く社会に影響を与えることになります。そうです、いまのSNSと同じです。

【2025/09/13 都築正道】